

## 放流方法の再点検

種苗放流による資源増殖は、減少した資源の回復手段として古くから行われてきました。いくつかの種類では、漁獲物中に一定量の放流魚が含まれるようになり、放流効果は浜に定着してきています。しかし、「放流さえすれば効果がある」と思っているならば、それは間違いです。放流効果を維持させるためには、常に気をつけなければいけないことがあります。

海に放流された種苗には、自然界の厳しい生存競争が待っています。放流直後の種苗を観察してみると、アワビ稚貝にはすぐにカワハギなどが集まり、稚貝をつついて食べてしまいます。またカサゴ種苗には、ウツボが次から次へと襲い掛かり食べてしまいます。いくら追い払っても、彼らはおいしい餌に夢中で少しすると再び集まってきます。いったん種苗を海に放してしまえば、人間は何もすることができません。いくら元気な種苗でも、種苗は自然界では弱者であることには変わり無く、適切な放流が行われなければほとんど死んでしまうでしょう。

これはアワビやカサゴに限ったことではありません。ただ「放流するだけ」では、ほとんどが害敵の餌になってしまいます。そのため、どうすれば種苗が生き残ることができるのかを常に気をつけている必要があります。放流した種苗が最も生き残りの良いように、科学的に裏打ちされた種苗の大きさや時期、場所などの放流方法のことを「放流技術」といいます。しかし、種苗の生き残りには、害敵生物や海洋環境などが複雑に関係するため、全てが解明されていません。したがって、わかっている知識の中から最良の方法で放流をすることになります。

最近、放流作業の慣れや漁業者の世代交代などにより、放流技術がうまく定着していない例を目にすることがあります。以前には、船の上からアワビ種苗を放流したり、マダイ種苗が放流後に堤防に集まらないように沖の根で放流したことがあります。こうすると放流作業は楽で、稚魚は堤防で目にしなくなるかもしれませんが、それはほとんどが害敵に食べられてしまったからです。作業に多少の手間がかかったとしても、アワビは害敵の攻撃から逃れられるような場所に放流しなければいけませんし、堤防に集まっているマダイを見たら、今年うまく生き残っていると考えるべきです。

放流技術は、慣れてしまえば単純なことなのですが、その裏には種苗をできるだけ多く生き残らせたいという思いがこもっています。せっかく放流する種苗なのですから、1尾でも多くの種苗が生き残るにはどうするかという視点から、放流方法を再点検する必要があります。 (高木康次)